

# 憶良の『めぐし・うつくし』考

今 井 福 治 郎

## (一)

万葉集卷五所収、山上憶良の長歌に、

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 世の中  
は 斯くぞ道理 もちどりの 拘泥しもよ 行方知らね  
ば云々 (五〇〇)

と云ふ、『感情を反さしむる』歌の一節がある。この歌は、  
日本古来の道德律、つまり人倫綱の枠内に立つた憶良の詩感  
を知る上にも興味深い作品であるが、世の中は、父母を見  
ると尊く思ひ、妻や子を見ると『めぐし愛し』思ふのは  
『道理』であるとする憶良の詩感は、『めぐし愛し』の意を  
解きほぐすことによつて、如何に憶良が旧来の道德律から抜  
け切ることの出来なかつた良官吏であつたかを知ることが出  
来よう。

この歌のメグシウツクシは、『米具斯宇都久志』と記され  
てゐるが、これはメグシとウツクシとの合成語であること

は、メグク又はメグシとの一語の例のあることによつて、容  
易に了解のつくところである。先づ最初にウツクシについて  
考へてみる。集中のこの用語例は、

ウツクシ

妻子見れば めぐし宇都久志 (五ノ八〇〇)

心宇都久志いで吾は行かな (十四ノ三四九六)

ウツクシ

出で行きし 愛夫は (四ノ五四三)

愛妹は隔りたるかも (十一ノ二四二〇)

浪雲の 愛妻と 語らはず (十三ノ三二七六)

汝が戀ふる 愛夫は (十三ノ三三〇三)

有都久之母にまた言問はむ (二十ノ四三九二)

ウツクシ

愛と吾が念ふころ (四ノ六八七)

恵と吾が念ふ妹は (十一ノ二三五五)

愛と思へりけらし (十一ノ二五五八)

愛と念ふ吾妹を (十二ノ二九一四)

ウツクシキ

愛人の纏きてし (三ノ四三八)

愛君が手枕 (十一ノ二五七八)

愛吾が妻離る (十九ノ四二二六)

ウツクシク

愛久其が語らへば (五ノ九〇四)

ウツクシケ

宇都久之氣真子が手離り (二十ノ四四一四)

ウツクシミ

宇都久之美帯は解かなな (二十ノ四四二二)

ウツクシミ

宇都久之美帯は解かなな (二十ノ四四二八)

愛見副ひてぞ来し (四ノ五六六)

愛我が念ふ妹を (十二ノ二八四三)

愛美君に副ひて (十二ノ三一四九)

のやうに挙げる事が出来るが、これらによるとこの語は、用字例としては『宇都久志』(一)、『有都久之』(一)、『宇都久之氣』(一)、『宇都久之美』(二)の一字一音書きの他は『愛』、『恵』が使用されてをり、活用は形容詞の形をとり『愛し夫』の体言接続の古形、『宇都久之氣真子』の体言接続の方言形もある。訓みは万葉仮名以外は、例へば、『愛我が念ふ妹』(十二ノ二八四三)の『愛』はウツクシトと訓むこ

とも出来、又、反対にウルハシキと普通訓んでゐる『愛寸』(四ノ六六一)は、ウツクシキ(元)、ナツカシキ(代精)、ウルハシキ(同)、オモハシキ(同)、のやうな訓み方も出て来るのである。

さて、集中の『愛』又は『愛寸』、『愛見』をウツクシ、ウツクシキ、ウツクシミと訓むべきか、又は、ウルハシ、ウルハシキ、ウルハシミと訓むべきかと云ふことは、この字面だけでは解決しない。それで、この解決の一助になる万葉仮名の例をみると、ウルハシに当る用字例には、『宇流波之』(五例)、『宇流波之吉』(一例)、『宇流波之美』(一例)があり、それは、

宇流波之と吾が念ふ妹 (十五ノ三七二九)

宇流波之と吾が念ふ妹 (十五ノ三七五五)

宇流波之と思ひ (十五ノ三七六六)

宇流波之等吾が念ふ君 (十七ノ三九七四)

宇流波之と吾が念ふ君 (二十ノ四五〇四)

又は 宇流波之吉君が (五ノ八一二)

のやうに使はれてゐるが、その用語例をウツクシと比較してみると、ウツクシには、『宇都久志』の終止形の二例、『有都久之はは』の形容詞の古い連体形の一例があるのに対してウルハシには、『宇流波之と』のやうに助詞に接続する形ばかりで、これが五例、『宇流波之吉きみ』のやうな本格的の連体形が一例ある。しかし、この結果からして直ちに、従来



ヲヤカニ、ヤサシ。嬋媛 ウルハシ、タヲヤカナリ、ニホフ。好 ウルハシ、カホヨシ、コノム。姝 ウルハシ、カホヨシ。媿 ウルハシ、カホヨシ。委 ウルハシ、ユタカナリ、クハシ。儼 ウルハシ、トモシ。儼 ウルハシ、イツクシ、シツカナリ。微 ウルハシ、ホノカニ、ヒソカニ、トモシ、シツカナリ。濡 ウルハシ、ヌラス、アタタカナリ、ヤハラカナリ。彩 ウルハシ、ヒカリ、イロトル。光 ウルハシ、ミツ、サカユ、ヒカル、ツヤ、カナリ。美 ウルハシ、ヨシ、アサヤカナリ、カホヨシ。艶 ウルハシ、イロフ、コヒ。純 ウルハシ、モハラ、アツク。等の例があるが、この中で、儼、濡、彩、光、美、艶、純の例は、ウルハシの意を愈々明瞭に限定してゐる。ウルハシに、ホノカ、シツカ、ヒソカ、ユタカ、ヤハラカ、アタタカ、トモシ、イツクシ、タヲヤカの訓を当ててゐるのは、日本の美が如何なるものであるかを物語るものであると同時に、カホヨシの意のあることはウツクシと相違して、人の姿、しかもそれが顔を中心として表現されてゐること、従つてニホフ、ツヤ、カ、テルの訓みのあることも、おのづから肯定出来るところで、つまり、ウルハシはウツクシと違つて、美しさを意味する傾向が含まれて來てゐることを表はしてゐる。さて万葉集中のウルハシの意であるが、万葉仮名の用語例に於いても、類聚名義抄のやうな意のものは一例もない、『宇流波之吉君が手慣たなの琴』(五ノ八一)にしても、立派な君の琴の意と解するよりも、これ

は、最愛とか、おなつかしいとかの意が適切である。これは又、ウツクシに於いても全く同じである。このやうにこの両者は、万葉時代にあつては、対象から得た美意識を、ウツクシ、ウルハシと表現することは決して無かつたのであるが、例へば『橘の古婆のはなりが思ふなむ心宇都久志いで吾は行かな』(十四ノ三四九六)の『心ウツクシ』が、心美しの意に流れて行く性格を持つてゐるやうに、ウルハシにもこのことが云へる。自に對する他を、ウツクシと感じ、ウルハシと思ふのは、他を自分自身の中に美の映像を画くからであつて、これが後になるに従つて『美』を表現する意に移行するのは、寧ろ当前と云つてよい。万葉人は、対象から得た心の隈を外部表出するのに、例へば、カナシ、シノブ、トモシ等の言語表現をしたが、カナシは『愛し』と『悲し』、シノブは『賞ぶ』と『偲ぶ』、トモシは『乏し』と『美し』といふ文字表現を同時に採用した。しかしこれらは、全く同一の心象を両語に表現したまでであつて、万葉人はこのやうに、心と表現とに、きめのこまかさを持つてゐたと同時に、ウツクシ、ウルハシのやうに生一本のところもあつた。つまりこれは、万葉人に原始的、素朴的な性格と芸術形象面だけではなかつたことを、如実に示してゐるところであるが、憶良のこの作品と同系列の家持の作品である『妻子見れば可奈之久めぐし』(十八ノ四一〇六)の用語例を見るとウツクシとカナシ(愛し)とが同一心象の異表現であることを知るのである。

(二)

次にメグシの意である。

この例は、集中に於いては、『人も無き古りにし郷にある人を愍久や君が戀に死なする』(十一ノ二五六〇)の『愍久』をメグクと訓み、『この山を 領く神の 昔より 禁めぬ行事ぞ 今日のみは 目申もな見そ 言も答むな』(九ノ一七五九)の『目申』をメグシと訓んでゐる以外の三例は、凡て万葉仮名が使はれてゐる。『父母を 見れば尊し 妻女見れば米具斯うつくし 世の中は 斯くぞ道理』(五ノ八〇〇)『いや懐しく 相見れば 常初花に 情ぐし 眼具之もなしに 愛しけやし 吾が奥妻』(十七ノ三九七八)『父母を 見れば 尊く 妻子見れば 愛しく米具之 うつせみの 世の道理と』(十八ノ四一〇六)のやうに、『米具斯』、『眼具之』、『米具之』の三つの用字例があるが、これをメグシと訓むことには異論はない。メグシの他の語に接続してゐる状態は、メグシウツクシ、ココログシメグシ、カナシクメグシの三態であるが、これらが共通してゐる点は、心象内の外部的表出語に接続してゐることである。それで先づココログシを解決することによつて、メグシを解決する手懸りを得よう。

ココログシの純粹の万葉仮名の例は、『已許呂具之』の一例で、他は、『情具伎、情具久、情八十一、情具之、意具美』

の各一例で、『情』、『意』は、集中のココロの用字例からみても、ココロと訓むことに異論はなく、『具伎、具久、八十一、具之、具美』の活用は、メグシのグシと同様に形容詞のをとつてゐる。意味は、

浅茅原茅生に足踏み意具美吾が念ふ兒らが家のあたり見つ (十二ノ三〇五七)

思ひ乱れて 君待つと、うらごひすなり 已許呂具之

さ見えに行かな 事はたゆたひ (十七ノ三九七三)  
相見れば 常初花に情具之 眼ぐしもなしに

(十七ノ三九七八)

の用語例からみると、対象から得た感情が内に籠つて鬱結し、それが外部表出しようとする直前の心の様を意味してゐるものやうであるが、これをもつと明確に意味づける用語例は、

春日山霞たなびき情具久照れる月夜に独かも寝む

(四ノ七三五)

情八十一おもほゆるかも春霞たなびく時に言の通へば

(四ノ七八九)

情具伎ものにぞありける春霞たなびく時に戀の繁きは

(八ノ一四五〇)

の三例である。具象化にくい心の中を対者に訴へるために天象に取材して表出してゐるのであつて、はつきりしないのでうつつとおぼろであるのが、霞の如しと譬へてゐるのであ

る。譬喩が發生した一因は、かうした面にも窺ふことが出来るが、これらの用語例によると、霞のやうに晴れることがなくおぼろの心が、コロログシであつた。『独し見れば涙具末之も』（三ノ四四九）のナミダグマシは、眼に涙がたまつてぼんやりしてゐる様を表はしてゐるのである。即ち、グシは晴れやらす、ぼんやりしてゐる様を表出する形容詞である。メは集中に用例の多い『目』で、つまりメグシは、心の中が眼に表はれて、眼がくもり、晴れやらぬ様を云ふのであつて、ナミダグムも同様に心の外部的表現であるが、これは実際に涙がたまるのである。メグシは涙の有無は必ずしも必要ではな<sup>s</sup>。

このやうに、メグシウツクシを考へて来ると『妻子見れば米具斯宇都久志』（五ノ八〇〇）と『妻子見れば可奈之久米具之』（十八ノ四二〇六）のウツクシとカナシクは、全く同一の意の異表現で、可愛い、いとしい、なつかしいの意であり、メグシはその心が極まつて、その人自身の眼に凝集した外部的表現語であることが、おのづから解決されて来る。

憶良が、父母を見ると尊く思ひ、妻子を見るとめぐしうつくしく思ふ情は、そのまゝ『父母は 枕の方に 妻子どもは 足あどの方に』（五ノ八九二）と、父母と、妻子との位置存在となつて具象化されたのであるが、憶良にとつて父母は絶対的尊嚴の存在で距離感があり、妻子には距離感が無かつた。そしてその短縮された距離感が、『めぐしうつくし』と外部表出

されたのであつて、憶良の子を思ふ歌は、おぼろである世界が、おぼろでない世界に形象化されたままで、変形であり変質ではない。